

新自由主義と

夢からさめた市民

堤 未果

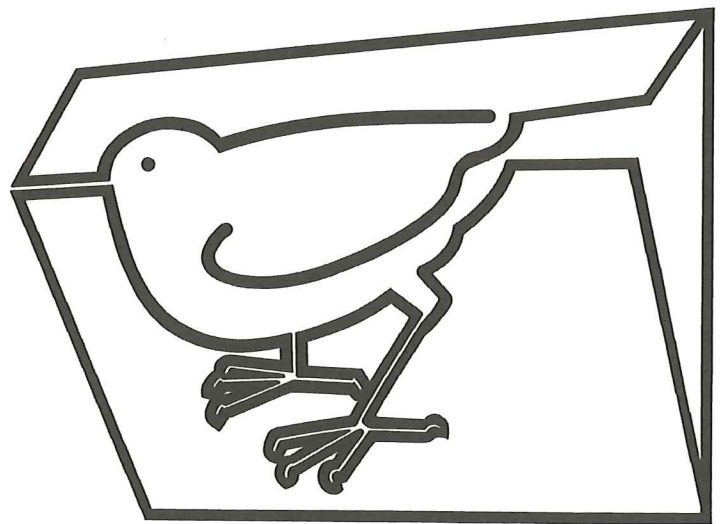
tsutsumi mika

人間が自らのために立ち上がるのは、いったいどんな瞬間だろう？

今年の春、サンフランシスコの大手デイスカウント店で出会った二十六歳のジニー・デイベイスは、大学卒業後から店員を始め、四年たった今もまだ就職活動中だった。

「多額の借金をして大学に行き、デザインの学士号を取ったのに、まともに暮らせる職につけません。健康保険も年金も貯金もない私のような若者が何故こんなに増えたのでしょうか？ 一体いつからアメリカンドリームは機会の平等でなくなったのでしょうか？」

彼女の言葉は、市場原理のみこまれたア



メリカ社会の中でもっとも不利な状況に立たされる若者の立場を代弁している。彼らはここ数十年の間に、市場原理を核にして変貌したアメリカ経済を底辺で支える中心としてがっちりと組みこまれてしまった層だ。

脱工業化とそれに代わるサービス業が競争の中心になったアメリカ労働市場では、九〇年代以降、ジニーのような非正規労働者の数

が急増し、現在、派遣は国内で二番目の成長ビジネスになっている。政府の規制緩和と法人税減税で非正規労働者を増やした同業界で、従業員は高卒か、高騰する学費で数万ドル（数百万円）の借金を抱えた大学生、もしくはジニーのように卒業しても職に就けず何年も、時には一生時給で働き続けるだろう若者たちだ。彼らには有休も組合を作る権利もなく、

失業保険や医療保険、労災を求めて闘う手段もない。更に雇い主にとって彼らの存在は、同じ場所に転落することを恐れる正社員に、サービスクラスや賃金カットに対して口をつぐませる効果もある。

一番怖いのは病気になることだ、とジニーは言う。新自由主義政策は規制緩和によって病院と患者の間に株主のごとく存在する医療保険業界の力を強めた。その結果、利益向上と効率化を強いられた過剰労働から心身を壊す医師が増え、適切な治療を受けられない医療難民や無保険者、法外な医療費の支払いができず破産する患者などを急増させている。

二〇〇一年九月十一日の同時テロ以降、社会保障費削減政策によって教育予算や弱者のための失業保険、医療予算などが削られ、セイフティネットがやせ細っていった。また、「落ちこぼれゼロ法」という教育改革法が、全米の高校に生徒の個人情報をもとに提出することを義務づけた。情報を得た軍は貧困層をターゲットに、子供たちが切望する医療や教育へのアクセス、最低賃金などをちらつかせて入隊させる「経済的徴兵制」を実施する。

自らの信念のためでなく生存権と引きかえに戦地に向かう若者たちが支える戦争は、そこに関わる建設業者や傭兵会社、石油会社などの大企業を潤わせた。あらゆる民営化がそうであるように、主導が国から市場に移るこ

とで戦争もまたマーケットの一つと化し、企業側は利益を持続させるために所有する大手メディアや議員たちへ圧力をかけ、戦争を続ける大義名分や仮想敵の報道は絶えまなく流れ続けている。ジニーは経済徴兵制で戦地へ向かう若者と、悪条件で働かされる自分たち非正規労働者は同じだという。「どちらも国の政策によって選択肢を奪われた結果、底辺で嫌々勝ち組を支えているのです」

新自由主義はその名に反して、人々から人生を選択する自由を奪う政策だ。

二〇〇八年のオバマ選挙にボランティアで参加したジニーは、政権始動から半年が過ぎた今、参加した多くの若者たちと同様にあの時の夢から覚めたという。公約だったイラクからの完全撤退は消え、二〇一〇年までにイラク戦費を超えるアフガン戦費によって、転落する国民を救うための社会保障費は今後さらに削減されるだろう。医療制度改革の議論はブッシュ政権と同じ保険業界ロビイストが主導し、国民皆保険案は最初から除外されていた。新しく提案された政府直轄の学資ローン拡大も、規制緩和で撤廃された消費者保護法が金融界の圧力で継続される限り、低賃金の非正規労働者は借金づつのままになる。

「オバマ選挙は最高でした。でも私たちは国作りに参加しているという麻薬のような高揚感に酔って、チェンジの中身を検証しな

ったのです。彼の組閣人事が全て金融関係の人間だということすら気にならなかった。市場原理でのちや未来までも効率化するという思想がウォール街の産物であることを考えたら、こうなることは予想できたはずなのに」
熱しやすいが現実が見えれば冷めるのも早い若者世代。だがオバマ選挙で得たものを、ジニーは別な力に変えてゆくことを決意した。各職場ではなく産業全体を相手に交渉し、州政府や市議会に圧力をかけるYWU（連帯する若年労働者組合）に加入したのだ。YWUは学生だけでなく労働者、教会、地域組織を束ね、さまざまなやり方で政治に影響力を与える組織として国内で拡大を続けている。

「二十六年生きてきて、本当に自分のために立ち上がったのはこれが初めてです」。そういうジニーの声は春に会った時よりもずっと生き生きしていた。魅力的なリーダーを応援する一支援者ではなく、自ら立ち上がり社会を変える主役になることは、分断され無力感を植えつけられた若者たちに決して消えることのない真の自信を与えるだろう。選択肢という自由を手の中に取り戻すために立ち上がり始めた彼らの姿が、海の向こうで同じように迷う日本の私たちへエールとなつて届けられる。

（つづみ みか・ジャーナリスト）
著書に「ルポ貧困大国アメリカ」岩波新書